

板東における私たちの体操

日本国板東俘虜収容所収容所印刷所、1919 年印刷

序

板東における体操の歴史を書くという考えは、1918 年に板東収容所体操クラブが設立された際に生まれた。オイヒラー曹長殿が当初から文書報告で体操の比較的重要な出来事を逐一書きとめていたが、この本ではそれらをもっとも頼りになる証人として原書の形で挙げさせてもらっている。1918 年末の体操の完全中止によって、板東収容所体操クラブ史を文書で残すという考えも自ずと表舞台から退いていた。1919 年春以来の体操復活の後やっと古い文書が再び掘り起こされ、体操クラブの歴史は、それがいまだ存続している限りは、書記である私の報告によってさらに書きとめられていった。いま我々がもはやそんなに長くはここにとどまらなくてもよいと思える時期となり、オイヒラー曹長殿からの励ましと私の体操仲間からの依頼によって、私は板東の体操についてのあちこちに分散している言明や報告を集め、若干の解説を付けて整理して作成して形で出版することを決意したのである。この作業の成果が、この本である。これは「徳島」や「松山」、「丸亀」の体操の前史を概略し、我々の到着後の「板東」での体操の発展を描いている。すなわち、始まりは前途有望だったが、抱かれていた希望が大きな幻滅を味わった時期を経て、1918 年夏に突然興隆したことについて、そしてむしろそうであるがゆえに体操への情熱の一層痛々しい、想像以上に急速な消失についても。そして最後に、より小さいがそ

の代わり実際にはより充実した、単なる野次馬たちから解放されたサークルにおいて体操精神が新たに甦ることについて、報告している。

ひょっとしたらこの本は、今日板東の体操グループに入っているすべての人にとって後年、収容所の時間の楽しい思い出の源泉となるかもしれない。このときの力強い身体訓練や仲間たちのサークルのなかでの楽しい共同生活が、鉄条網病の脅威を遠ざけてくれたのだった。この意味において、自分のこの作業が受け入れられることを私は願う。

板東俘虜収容所

1919 年 7 月

ヴァルター・ムックス

板東体操クラブ書記

1919 年 6 月 29 日、板東

健全な精神に健全な体が — この美しい言葉から、私たちの収容所新聞第 1 号の最初の記事は始まる。それは「板東のスポーツ」というタイトルで我々がここに到着してから最初の 5 か月間においてスポーツ活動がいかに進展してきたかについて正確に報告している。それによると、156 人の選手を擁する 13 以上のシュラークバルチーム、143 人の 13 サッカーチーム、ホッケーとバスケットボールのそれぞれ 55 人の選手がいる 5 チーム、80 人でファストバルの 16 チームが作られた。そのほか、54 人の面々がテニスに熱中していた。この数は疑いもなく、2 年半の収容所生活にもかかわらずいまだに旺盛なスポーツ精神があることをよく示すものである。しかし体操については、私たちはいまだに一言の言及も見出すことができない。にもかかわらず、「徳島」からきた人々のスポーツ週間のこと、そればかりかスポーツ月間のこと、同様に誇らしげに自分たちの体操祭について語ることができる「松山」から来た仲間たちのことを、なにも聞かなかっただろうか。『トクシマアンツァイガー』と松山収容所の『ラーガーフォイアー』の両収容所新聞には詳細なそれについての報告がある。最初に挙げた二つの収容所では体操があらゆる方面からの支援で興隆した。丸亀収容所にいた人たちだけは、初期の体操時代についてある種苦い思いを抱いていた。他の二ヶ所ではあらゆる方面からの支持を受けて体操がおおいに盛り上がっていたのに対して、クラブを作って体操を盛り上げようとしたとき、すでに設立されていた体操クラブが B. 収容所最先任曹長の発言を受けて解散したのである。それというのも……、そう、それは兵隊にとって協会設立はふさわしくないという理由からだった。この禁止にもかかわらずレスリングは続けられ、その活動が徐々に反響を呼び、後にはまたそのお

かげで体操祭が開催されるまでになった。百年前には実際、どんな自由な発展も政治的理由で抑圧され、体操にも制限が加えられた時代もあった。当時はこの禁止をくだんの理由から正当化することができると思えたとしても、20 世紀にここの収容所にあつてはこのような禁止をなんらかの形で正当化する理性的な理由を求めても無駄であろう。

「板東」に到着した最初の日はこの体操時代のことを話す者は皆、三つの収容所の融合によって体操がここで意味と広がりを持っていると確信していた。そしてプリンツ一等砲兵兵曹が面倒をみていた徳島収容所の体操選手によって鉄棒と平行棒が急いで据え付けられたのだが、そのことがそう確信させるきっかけとなったようだ。というのも、ここでは同じ熱心さで引き続き体操がなされることになったからである。残念ながら体操はわずかしき試みられず、すぐにまた眠り込んだ。別のグループの体操もそれと同じだった。今述べた器具の据え付けの後、プリンツのグループはほんの数回しか体操をしようとはしなかった。ヴァルター伍長指揮下の松山収容所公会堂のチームもまた、ときどき体操をすることで新しい収容所で体操精神を活発に保とうと大いに努めた。またフェルヒネロウスキーとクーフースが指導する第 2 中隊（前丸亀収容所）の二チームは熱心に自分たちの器具の据え付けにかかり、それが収容所のケーキ店の移転によってその場所を追いやられたときにも、彼等はひるまず二度目には自分たちの器具を板東の南西の物干し場に据えたのである。松山収容所山越のコーチ・ヤンセン軍曹殿によっても同様に自分の体操組織を統合しようとする試みがなされていた。しかしこうした試みも最初だけだった。そえゆえ 1917 年 11 月に発行された収容所住所録でのチームについての言及もまた、すべてこうした最初の試行時期の体操活動に基づくものである。ただ最後に名前を挙げたふたつのチーム、つまり第 6 中隊出身者から成るムックスのチーム

と混成部隊出身者から成るツインマーマン一等軍曹のチームのことなのだが、後になって初めて作られたこの二つのグループだけは、板東収容所体操クラブの設立にいたるまで定期的に体操をしていたのである。

体操がいかに不振であったかは、次に挙げる第2中隊体操コーチCl. フェルヒネロウスキーの論文（『バラック』第2巻、1918年5月5日号）を見れば一番よくわかるだろう。その論文はもの足らなさを実感して書かれている。こういう内容だ：

体操と陸上競技

私は収容所でなんどこういう問いを聞いただろう。「なぜここではこんなに少ししか体操をしないのか、そしてなぜ陸上競技はまったくしないのか」。

私たちが一年前「丸亀」から「板東」へ移されたとき、ここで待ち受けているであろう大きな気晴らしを楽しみにしていた。とりわけ体操と陸上競技に関しては、私たちは活発な活動とすばらしい競技があるものとあてにしていたのだ。「丸亀」では体操と陸上競技は大変盛んだった。どんな小さな場所も運動場に変えられ、毎日体操選手が練習しているのを見ることができた。ここではもっと広くてきれいな場所が使えるのだから、私たちは体操の大いなる興隆を期待していた。残念ながら私たちはこの見方には心底欺かれてしまった。たしかにいろいろなチームがこの収容所で体操を盛んにしようと試みたが、無駄に終わった。サッカーやシュラークバル、ファウストバル、バスケットボールといったさまざまなゲームスポーツが体操と陸上競技を完全に追いやってしまった。体操向きの素質を持った人々がそうした自分自身に眼を向けずに引きこもってしまったのは本当に残念なことだった。ひょっとしたら彼等は、後になってそれを後悔するかもしれない。というのも、自分を優秀な体操選手にするこのような機会は後に

なってからでは誰にも与えられないからだ。母国の体操クラブだったら一年間で学ぶことを、ここでは半年の間に習うことができる。私はこのことを幾人かの初心者から見て知ることができた。それまで体操のことを全く知らなかった人たちが数か月後には第一チームの体操模範競技に参加することができたのである。もちろんそれは、良き意志とゆるぎない勤勉さがあつてのことだが。

「松山」や「徳島」といった別の収容所でも大いに体操が行われた。

体操や陸上競技がすっかり途絶えてしまった原因はいったいなんだろうか。すでに述べたように、最大の原因は体操を追いやった球技スポーツである。とはいえ球技スポーツに参加しない体操選手もたくさんいる。もはや体操をしないのはなぜかという問いには、彼等はたいてい「だんだんと体操するような歳ではなくなった」とか「いやあ、怠け者になってしまつて」と答える。別の人は体操の後にはあまりに「腹ペコ」になると主張する。こうした発言に対してはただ「よい言い訳にはまたそれなりに意味があるものだ」としか言えない。熱心な体操選手を邪魔するようなものは何もない。そういう人は自分を体操することから引き離すあらゆる障害を乗り越えていく。罪の一端は体操コーチ自身にもある。彼等は必要な意志の力を示し、人々をしっかりと束ねることができなくてはならないのである。

体操器具の多くが足りていない状態である。ひょっとしたらこの点については収容所倉庫か救護金を役立て、困難を取り払うことができるかもしれない。一般的な体操の本格的な実施には次のような器具が必要であろう。円盤、シュロイダーバル用ボール、槍、高跳び用スタンド、そして踏切板。一般的な体操は球技スポーツと近い関係にあるので、我々の収容所運動部当局がこの状況を引き受けるのが望ましいだろう。ひょっとしたらこの数年で陸上競技大会を六種もしくは九種競技の形で開催することができるか

もしれない。

そうすれば体操と陸上競技への関心を高めることができると、私は思う。このような競技ができるようにするためには私は大抵のことはなんでも喜んでするつもりだ。それゆえ私は体操コーチに彼等の方でも全力を傾注し、この催しを成功させるようにすることをお願いしたい。「年取った者」はその年を、「怠け者」はその怠け心を払い落とし、再び若く勤勉になって自分自身の身体のために、そして我らがドイツの祖国の繁栄のために闘うことを願う。

フェルヒネロウスキー

この言葉は無駄に書かれたわけではなかった。ほどなくそれらは実行に移された。数日後兵舎のドアに次のような声明が張り出されたのだ。

板東、1918年5月14日

呼びかけ！

私は「収容所体操クラブ」を設立しようと思っている。目的：陸上競技の演技（ジャンプ、砲丸投げ、槍投げ、円盤投げ、シュロイダーバル、ランニング）と体操の育成。参加者はこのリストに自分の名前を記入すること。署名の締め切りは5月21日。

フェルヒネロウスキー

この呼びかけに従う者の数は少なくなかった。「板東収容所体操クラブ」は設立したが、なお専門家の指導を欠いていた。これまでの体操活動の後援者・オイヒラー曹長とフェルヒネロウスキー一等海兵はすぐに、約50人の会員を擁する協会には一人の熟練した専門指導員が体操コーチとして

必要だと確信するにいたった。彼等はさらに、この役には体操教師のヤンセンだけが該当するという点で意見の一致をみていた。それで彼等の依頼もあってヤンセンは協会の指導を引き受けたのだ。

オイヒラー曹長には今まで通り役員と会計、書記の役が任された。

ここに、「板東収容所体操クラブ」の成立についての当時の書記オイヒラー曹長による手記がある。

板東、1918年5月23日

私たちが「松山」からここに移転させられ、すぐに運動場作りを始めて以来、これと関連する作業によって体操への関心が起きることはなかった。それはひとつには関連する作業のためであるが、それからまた「松山」から来た人々にとってはたしかに、いつもと違った楽しみである球技スポーツができることへの見込みが体操を背後へ追いやったためである。実際、このいましい松山収容所時代でも十分体操はしていたのだ。鉄棒そして平行棒は確かに備え付けられたのだが、始められたものはすべてふたたび水泡に帰した。それに加えて、体操の魂ともいうべき存在だったヴァルター伍長が筋を違えてもはや体操ができなくなった。

そのとき私は、数日前に自分が柔道の講演のために準備したブッターザック大尉の写真から柔道実演会を、フェルヒネロウスキーとともに催すということを思いついた。そういう話し合いの際に私たちはまた、フェルヒネロウスキーが体操活性化のために強く訴えかける言葉を述べた『バラック』の記事にも言及した。彼はむろん一般向け体操を目指していたが、私はむしろ器械体操の方を支持していた。「大理石¹」と柔道の準備からその後、収容所体操クラブのために掲示が結果として出されることになったのだが、

1 組体操の一種。

このクラブは今日ヤンセン伍長に引き継がれてその生みの苦しみを乗り越えたのである。組織の準備はフェルヒネロウスキーとフォラントと私によってなされた。いまこそ前進せんことを。がんばろう！

クラブのコーチがヤンセン氏によって引き継がれることによってチーム分けが検討され、以下のように公表された：

板東収容所体操クラブ

我々の依頼で予備役伍長ヤンセン氏が収容所体操クラブのコーチを引き継いだ。

78 人が器具体操に 68 人が一般的な体操に参加の申し込みをした。

さしあたり次のようなチームが編成された：

第 1 チーム：

体操実地指導者：ルドルフ—鉄棒、フェルヒネロウスキー—平行棒。

ベーヒング、オイヒラー、フレッセ、クナープ、クノープ、クーフース、マイ、メンケ、プレス、ゼーゲルケン、フェッター、フォラント。

第 2 チーム：

実地指導者：バルクホーン。

シャルフ、ボルコアー、パウアー、クロイツァー、ショッペ、マロン、グラウル、ロッソウ、ハンゼン、ゴルダマー、ヴォルムス、クラウス、ヤンセン軍曹、ファイスト。

第 3 チーム：

実地指導者：ゼーゲルケン。

ヤンツェン、ヴィンクラー。ルートハルト、レッテルンマイアー、クルツケ、ハンガー、リンデンベルク、ハンク、エルスナー、オール、ビショッフ、

ヘルムス、レーザー。

第 4 チーム：

実地指導者：ムックス。

R. コッホ、シューベルト、シュタイル、フォン・コステノブレ、シュタール、バルトス、ルートヴィッヒ、ケムプフ、ライディッヒ、ドロピウスキー、クレーマー、ムラデック。

第 5 チーム：

実地指導者：ガックシュタッター。

ヘルム、ヘヒト、J. ミュラー、シルク、フーバー、ミルスヴァ、ヴェルター、メラー兵曹、フィネヴィッツ、L. ミュラー、ティム、O. シュルツ。

第 6 チーム：

実地指導者：レッチュ。

グラディンガー、ウリブリヒト、ボス、H. グロースマン、フィードラー、フィッシャー A.、Wilh. マイアー、シュテッペン、A. ユンカー、オッフアーマン、ベーマー（哲学修士）。

体操レッスンは共同で行われる。その時間は当面、

水曜日と土曜日の午後 4 時から 5 時まで

と定められた。

プリンツ一等砲兵兵曹指揮下の古参の面々のチームは我々の体操要領に従ったが、別の日に体操する余地も残しておいた。

フェルヒネロウスキー指揮下の陸上種目は

水曜日午前 7 時半から 9 時まで行われる。

第二の時間帯については、私たちはなお交渉中である。

新指導下の体操運営のやり方をもっとも明らかにしてくれるのは、最初の体操レッスンの前に発布された実地指導者あての回状である：

全実地指導者およびプリンツ上等兵曹宛て

5 月 24 日午後 6 時半

「板東収容所体操クラブ」の体操運営の原則

実地指導者の体操は毎日曜日の朝 7 時から 8 時まで開催する。

後に決められる実地指導者代理はこの時間に参加する。

体操の順番：体操開始前に全チームは事務棟の前にバラック第 5 棟を正面に以下のように位置につく：

	第 4 チーム	第 5 チーム	第 6 チーム
シニアチーム	第 1 チーム	第 2 チーム	第 3 チーム

体操コーチ。

実地指導者は自分のチームの右側に立つ：体操の姿勢に注意すること。「器具のところへ… 行進、行進」という命令で器具のところに行く。器具の所では接近したり離れたりする際にはびしっとした行動に気をつけること。

器具の順番は器具の配置によって定める。これは当面は以下のようにする：

第 1 チーム。跳躍、平行棒、跳躍の助走は西から東に向かう。

第 2 チーム 鉄棒と鞍馬

第 3 チーム 平行棒と跳躍

第 4 チーム 鞍馬と鉄棒

第 5 チーム 鉄棒と平行棒

第 6 チーム 平行棒と鉄棒

器具の交替は体操コーチの命令に従い駆け足で。

チーム日誌は、実地指導者が書くこと。そうすることで時間厳守を推進してもらいたい！

徒手体操は器具体操後に行う。各人には最大級の集中と周到さが求められる！

体操服：白色、短パンと長いソックスが望ましい。

器具は体操の時間前に、さしあたり第1チームから順番に、チームが据え付ける。片付けは徒手体操の前に号令に従って行う。据え付けは器具監督のムックスの監督のもで行う。

板東、1918年5月24日

このころ体操選手たちに生気を与えた新しい精神の少なからぬ部分は、私の見たところ、オイヒラー曹長が5月26日の『バラッケ』に書いた論文のおかげであるように思われる。

軍事的青少年教育

「松山」ならびに「徳島」で私たちは、日本の生徒たちが銃や銃剣を身に着けて実習に出動しようとしている場面に遭遇した。彼等は私たちに、日本の国が近代や大都市、工場、誤解された西洋のものの見方によって背後に追いやられた「大和魂」戦士の魂にふたたび生命を与えようとしていることを思い出させる。生徒の軍事教練によって日本では軍隊時代の下準備をしようとしているのだ。我々の本国ではすでに以前から、この「兵隊ごっこ」に対してどういう態度をとるのかについて議論が戦わされてきたが、とりわけこの戦争で問題がいまだかつてないほど切実だったのは、いかなる準備教育が施された人的資財が軍隊にとって一番役に立つのかとい

う点だ。学校にいるときからすでにある種の軍事教練を始めるのをよしとする人は、それによって比較的短い服務期間と軍予算の軽減をもくろむことができるかと期待している。そういう人たちに対して、このように早期に青少年の肉体を利用することで青少年に生じる危険性と、訓練する側の士官や下士官たちのこのように熟達させられた人材を扱う際に恐らく感じることになる困難さを持ち出す人がいる。また別の人たちはこれまでワンダーフォーゲル運動や体操クラブでなされてきたようなやり方での準備的軍事養成のみを望んでいる。つまり感覚や器用さ、エネルギーを同様に軍隊の要求に向ける準備となるようなやり方を、である。

この問題について専門知識の見解がどんなに多くの点で割れたとしても、新兵が力強く、器用に、精神的に利発で、根気よくなるようにする点では体操が第一であるということでは意見は一致するだろう。

そして私たちがこの時期、わが民族のいくつかの新しい精神的で経済的な潮流から外れた所にいることを痛々しく思っているとすれば、かつて一度はドイツの体操をしたことのある人は皆、我々の民族の力と国家防衛のために極めて重要な問題などについて述べている雑誌『ヒルフェ（援助）』の記事を自分たちに向けられたものとして読むことだろう。

すなわち「体操と身体的養成は軍事的青少年養成において主役のひとつを演じるのではなく、まさに主役そのものなのだ。職人道具がなくて手工業は営まれず、体操道具なくして、青少年や軍隊、帝国の安全と繁栄が必要とするような体操はできない。すべての行政官庁、すべての町役場が、そしてすべての学校、教師、教授、そしてまたすべての党、そしてなканずく軍隊自体が体操道具のこの装備を求めず、押し通すとしたら、何十年も前から体操によって人々を、若者を、学校卒業者を最高に教育するのに全力を尽くさずして、さらに有為な人々が著しく増えたとしたら、それは

まったく理解できない謎に思えるだろう。戦争と恐ろしい戦争教義、そして戦いがとらせた方法はしかし、私たちにノーと言うように呼びかけている。それらは私たちの耳に、お前たちの若者をすぐに体操させ、体操で熱をこめて念入りに訓練するようにと大声でわめきたてている。筋肉の力、神経の力、器用さ、素早さ、軽快さ、順応性、柔軟性、カモシカや虎のような跳躍、猿のようによじ登る能力、利発さ、素早い決断、熟練した判断力、訓練された視力、決然とした態度、そして勇氣、こうしたものは最近の兵士の決定的な特性であり、そうした特性は未来においても意義のあるものだろう」等々。

そして和平締結後でなければ大いなる国民戦線へ赴くことのない私たちにとっても同じことである。あるいはもし私たちが自分の村でホッケーやサッカー、ローンテニスのための競技場がもはやなくなっているとすれば、このように言うことになるのではないか。そう当時板東では、私たちはこのイギリスの「スポーツ」をする時間があつたが、残念ながら私たちは当時、我々ドイツの体操には興味がなかった、と。

E.

しかしながら、かなり事が進行してしまった後となつては、残念ながらこの記事の最後の言葉が多くの人にはきっといつか当てはまることになると思える。

5月26日日曜日、体操開幕祭が開催されたが、このことについて私たちは6月2日の『バラッケ』から次のような報告を聞くことができる：

「板東収容所体操クラブ」

幸運な父が自分の健常な息子の誕生を知らせるときのように、収容所体

操クラブが5月26日のその体操開幕祭の成功について語るのももっともなことである。

すでに準備作業のときから、我々の体操への「全般的な欲求」の時がやってきたことが示されていた。人々は再び「結集」し、昔の体操クラブ時代や「松山」や「丸亀」、「徳島」における輝かしい体操祭を思い出すうちに身が引き締まり、実際それはもう一度試みなくてはならなくなった。

そうして最初の呼びかけで器械体操に78人の参加者が、一般的な体操には68人の参加者があった。1918年5月26日、体操が在庫品物置小屋の前の体操場で7つのチームによって始められた。二つの鉄棒、二つの平行棒、鞍馬、そして跳び箱では、体操実地指導者のフェルヒネロウスキーが第1チームを、バルクホーンが第2チームを、セーゲルケンが第3チームを、ムックスが第4チームを、ガックシュタッターが第5チームを、そしてレッチュが第6チームをそれぞれ代表して体操をした。プリンツ一等砲兵兵曹指揮のシニアチームは徒手体操と遊戯で体操全体の印象を活気づけ、ドイツの体操の社会的な、つまり一般的なものになる傾向を象徴的に表現した。というのも我々の体操では老いも若きにも、どんな場所であれ、人がたくさん参加すればするほどそれだけ一層よいものだからである。好天のもとで体操は進行していった。体操のコーチ・ヤンセン予備役伍長は隊から隊を回り、まどろむ体操精神を目覚めさせた。最後には簡単ではあるが「人気を博する」徒手体操のいくつかの組が演じられた。全体にお祭り気分のようになり、ほっそりしていてぴんと張った姿を見てどの体操選手も笑い、これらすべての戦士たちから「不機嫌」が根こそぎされるのを見て喜んだ

たしかに体操はまずは我々自身の身体と我々の健康に奉仕するものだったが、外国ではそれぞれが自分の民族のためにできるかぎりのことをする